

FALL 2025

VOL.21

「教えたい文化」から 「学び文化」へ



By ALRCS Q Team

津久井 純 先生

学生時代一番好きだった科目は何ですか？
また、その科目は先生にどのような影響を与えましたか？

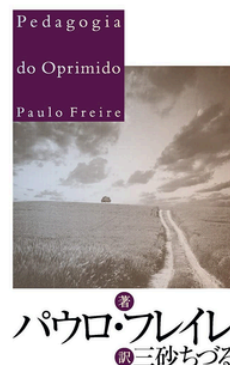
学生時代に最も印象に残っている科目は、大学院「自分史」です。教育学部時代、「学ぶとは何か」「教育とは何か」という本質については、正直なところよく分からないまま過ごしていました。“出会ってしまった”のが「自分史」です。ゼミを担当されていたのは小沢有作先生で、私が関心を持っていたパウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』を日本で最初に翻訳した方です。この授業には教科書や理論的なテキストはありません。さまざまな立場の人が自身の人生について語ります。評価も、正解もありません。最初は「これが授業なのか」と戸惑いました。しかし、回を重ねるごとに、他者の人生を聴き、「その人がその時何を思ったのか」を知ることに深い学びがあると感じるようになりました。

今は教職に就かれています。教員をしていなければどのような職に就かれていたと思いますか？

本当はプロスキーヤーになりたかったのですが才能がありませんでしたね！
ベトナムに留学していた20代は NGO職員に憧れていました。ですのでそれを追い求め NGO職員として国際協力の現場で働いていたと思います。特に、強い思い入れがあるベトナム社会に関わる人々を支援するような仕事、あるいはベトナムを拠点に周辺国も含めた国際協力活動に携わっていた可能性が高いと思います。

教育学

50周年記念版



被抑圧者の

藍紀書房

幅広い経験をお持ちだと伺っています。
APUに着任するまでのキャリアについて簡単に教えていただけますか？

大学院修了後は、JICAの教育協力プロジェクトに関わるコンサルタントとして活動してきました。私が関わり始めた2000年代初頭は、JICAによる教育分野の技術協力が本格的に始まった時期でした。その流れの中で、ベトナムの教師教育に関するや技術支援に携わりました。その後、カンボジア、インドネシア、ミャンマー、エチオピア、パレスチナ、ネパールなどの国々で主に教師教育に従事してきました。実は写真学校に通ったことがあり、あるNGOでは開発教育の映像制作に1年間携わりました。



開発途上国で現地の教員を研修していく中で、印象に残っているエピソードや経験はありますか。その経験は先生自身の教育哲学や教育観にどのような影響を与えましたか。

特に印象に残っているのは、ベトナムで行った教師教育です。JICAのプロジェクトでは、通常であれば全教師を対象に一斉研修を行うのですが、私たちは少数の実験校を設定し、日常的に学校に入り込む方法を取りました。学校の教師たちとの日常では多くの衝突や葛藤を経験しました。

具体的には、一人の現地の教師が、自身の授業を振り返る中で「自分の授業では生徒全員が理解している」と強く主張し、他の意見にも耳を貸しませんでした。しかし、録画した自身の授業映像を見たことで、学習につまずいている子どもがいる事実を認めざるを得なくなりました。

この気づきは、博士論文の中心的なテーマにもなりました。



先生は、ベトナムやカンボジア、UAEなど、様々な場所で教育モデルを研究してきたと思います。これらの地域における教育改革や授業実践において、違っていた点と、共通していた点は何でしたか？

色々な地域に行きましたが、どこに行っても教育現場の本質は大きく変わらない、というのが私の考えです。

多くの国で見られるのが、教師主導のトップダウン型授業、つまりは「教えた文化」と、学習者を重視する「学び文化」が対立していると思います。前者は、教師が講義を行い、学習者がそれに従う形で進む授業です。また、政策決定者が学校と教師の活動を指定しようとします。一方で後者は、学習者が何を考え、何を探究し、どのように表現するかを大切にします。



心理学者のジェローム・ブルーナーは、人間の認知様式として、前者をパラダイムモード、後者をナラティブモードと呼びました。



この経験から私は、教師教育とは外から制度やカリキュラムを変えることではなく、教師自身の内面が揺さぶられ、気づきを通して変化していくプロセスなのだと実感しました。



決定事項は、その影響を受けるすべての人が理解し、同意するまで議論され、交渉される。

グループが決定すべきことを特定した後、各メンバーに、次の回答から1つを選ばせ、提案された決定についてどのように感じているかを尋ねる：

全員が1~4のいずれかであれば、コンセンサスが得られたことになり、次に進むことができる。

1. 私はこのをためら
2. 私はそのきると思
3. 私はそのきるが、ない。
4. この決定拒否す
5. この決定拒否す

<https://waterloo.ca/centre-for-teaching-excellence/catalogue/flip-sheets/group-decision-making>

パラダイムのモードとは、こうすればこうなるという理性が、人が実際にやっていることよりも優ると考える様式です。つまり、考え方として命題を重んじ、命令的です。これに対し、ナラティブモードとは、人が行為し、自らの行為を意味づける過程に寄り添おうとする思考様式です。「今ここ」を重視する考え方です。この二つの文化構造は先進国、途上国を問わず教育の世界に存在しており、どちらの立場に立つかが改革の鍵だと考えています。特筆すべき問題点は学習者が見えていない教師、政策決定者が多く存在することです。だからこそ先ほど述べたような「教師が気づきを通して変化していく過程」が重要になってくると感じています。

先生の教育のモットーを一文で表現してください。

「学び文化を拓く」ということです。学びとは、個人がそれぞれ正解に達する行為ではなく、他者と一緒に何かに出会い、それに形を与えていく過程です。教えた文化よりも、学び文化を広げたいです。

それにしても、どうして世の中には教え文化がこんなにはびこっているのでしょうか。人が教えたかと思っていることは、学習者に、往々にして、学ばれていません。教えた、教えたかったということではなくて、学ばれた事実を議論したいです。

APUでの授業づくりについてお聞きします。学生に教える際に意識していることや、心がけていることはありますか？

直なところ、「こうすればうまくいく」という確固たる戦略があるわけではありません。ただ一つ大事だと思っていることは、「待つこと」です。今日授業で何かを学んだ、知ったからといって、明日になってそれを本当に自分のものにできるわけではないですよ。学びを短期的に見ないで、長期的に、大学の数年間で体に染み込んでいくと考えたいです。自分自身の大学時代はただ「青年の主張」を繰り返して、自分の身勝手さにも、自分が周りの人とどう生きていきたいのかにも、



気づくことができませんでした。APUには、かつての自分を見ているような学生もたくさんいます。まだ自分と向き合う作法を知らない学生に対して、私が怒ったり無理に指図しても響きません。ちょっとずつ変わったらいいいねと祈るような感覚で、長い目で見守るようにしています。

学生が本当に表現したいこと、やりたいことを見つけて、認めてあげたいのですが、授業の枠組みの制約から難しいところです。それでも、できるだけ選択肢を与えたいと思っています。「今できない、やらない自由はある」と伝え、学生自身の選択・時間軸で取り組んでもらうようにしています。

スチューデントサクセスワークショップ (SSW) や多文化協働ワークショップ (MCW) などの授業づくりで意識していることはありますか?

)SSWは本来、高度な授業だと考えています。書くのが苦手な人もいる中、学術的な訓練をすることが目的です。しかし、方法はあると思います。

学術的なテーマでも学生の興味に寄り添うことです。どんな興味も、必ず既存の学問につながります。普段考えていることを学術的な問いに変えるには学生にとってジャンプが必要です。私は、対話の中でそれを支援しています。ソクラテスはこれを産婆術と言いましたね。教員との対話があれば、学生も努力します。学生に、「本当に知りたいことを書きましょう」と言うと、彼らは動き出します。



初年次教育では学生の主体性が特に大切だと思います。講義の中で学生を巻き込むために意識していることはありますか？

教員の力も重要ですが、スチューデント・アシスタント（SA）の力に注目しています。

前期のグローバルリーダーシップの基礎（FGL）の授業でも、学生が最も本音を語っていたのは、授業後にSA振り返りを行う時間でした。学生にとってSAは、教員とは異なる「少し先の目標」であり、「あんなふうになりたい」と思える存在です。こうした先輩学生への憧れを生かすことで、より前向きな学習環境がつけられるのではないかと考えるようになりました。

教員に依存するのではなく、SAや尊敬できる先輩の姿を見て育つ仕組みをつくることこそが、最も力のつく学びにつながるのではないのでしょうか。

SSWのアイスブレイクとして行っていた、「哲学対話」について、先生のお考えを教えてください。

哲学対話とは、日常にある当たり前の言葉を数人で考え直す、ゲームのようなものですね。もともとはアメリカで始まったと聞いています。日本では永井玲さんが各地の学校や行政で実践されています。お題の例として、「ヤバいってどういうこと？」、「悪口ってどうして楽しいの？」、「ずるって何だろう？」などがあります。これを行うと、つい本音が出てくるのです。これまでのSSWのアイスブレイクでは、近況報告をしあうことが多いです。しかし私は、近況報告は、学生同士の信頼関係がないと話せないのではないかと思います。哲学対話のお題だと、他者が意外なことを言うことがわかり、その意外性を認め合うことから学生同士が信頼関係を作れるのだと思います。本音の吐露が連鎖し、互いの素顔が見えてきます。



先生にとって「質の高い授業」を一言で表すとどのようなものですか？

私は、「ジャンプ課題」がある授業こそが質の高い授業だと考えています。教育学者の佐藤学先生が言うように、学びは「背伸びとジャンプ」の時に起こるのです。今できることをなぞるだけでは、それは学びではなく作業です。

現在の学校教育では、すでに答えの分かっている問いに取り組む場面が多く見られます。しかし、本当の学びは、知らないことについて考え、正解のない問いに向き合う中で生まれます。正解がないからこそ、学生同士の議論が始まり、教員が介入しなくても学生たちは問いに対して考え、議論し学びを深めることができます。



FGLの授業では、テキストに書いてあることを確認するだけでなく、一歩進めた答えのない問いを与えて、学生たちが議論できるようにしています。APUの学生は、こうした「ジャンプ課題」を与えると一気に主体的になります。答えのない問いを起点に探究が生まれ、意見を交わし合う。その状態こそが、質の高い授業だと考えています。





APU生へのメッセージをお願いします

APUに来て何をしたいかわからない、という学生も多いと思います。授業の中で様々な課題が出るとは思いますが、その中で「本当に自分が知りたいこと」を見つけてほしい。みなさんはつい、「こう答えれば単位は取れるだろう」と考えがちでしょう。とても忙しいので、その気持ちもわかります。しかしそれを続けているとつまらなくなるでしょう。大学には、本当に知りたいことを知るために来たのではありませんか。

学生の中には、知りたいことがわからないと言う人もいます。そんな人には、今に流されず、今関心のある小さなことに沿って素直に「動く」ことを勧めます。先生の言葉があなたに響いたら、先生にそのことだけでも伝える。ある芸術・スポーツに興味があれば、関係団体のサイトにメールを書いてみる。バイト先で面白い人を見つけたらその人と個別に会って話をする。気になる本があったら、出版社に電話を試みる。私がベトナムに興味を持ったのも、ある番組についてテレビ局に電話したことがきっかけでした。

インタビューとライター からのコメント



石川 藍宇

今回のインタビューを通じて、津久井先生の教育に対する熱い思いに私自身とても刺激を受けました。

APUに着任されてまだ1年にも満たないにもかかわらず、学生と積極的に関わり、別府での生活も全力で楽しまれているお姿は、どんな場所においても

目の前のことに本気で向き合う先生の魅力そのものだと感じました。

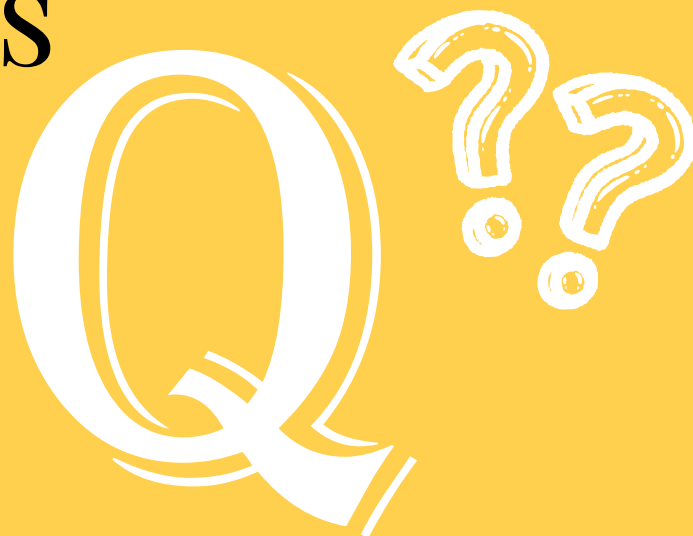
この記事が、読者の皆さんにとって「学ぶこと」を改めて考え、新しい一歩を踏み出すきっかけになれば嬉しいです。

柴田 悠太郎

このインタビューでの先生のお言葉を通して、先生は常に「他者と向き合うこと」や「内面を知ること」を大切にしながら教育活動に取り組んでいらっしゃるという印象を強く受けました。そして、その考えが反映された先生の授業は、受講生であると同時に一人の「学習者」である私たちに、多くのヒントを与えてくれていると感じました。

特に、一回生である私は、「学び」に対してまだ曖昧なイメージしか持っていませんでしたが、今回インタビューをさせていただく中で知った先生の考え方や価値観は、今後探究活動を進めていく上での重要な指針になると感じました。

What is



APUには素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生方の授業改善にも繋がります。そのために、インタビューを行い、授業の工夫を教えてもらいたい、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、様々な意味を込めて「Q」と名付けました。これらの記事が、先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。